

## 『シュトラースブルクの誓い』の原文対比

高 橋 輝 和

カルル大帝が築いた広大なフランク王国は、ルートヴィヒ敬虔王の死後に3人の孫の間で起きた熾烈な相続紛争の結果、843年のヴェルダン条約によって三つに分割され、長男のロタールが中央部を、次男のルートヴィヒ（ドイツ王）が東部を、異母弟の三男カルル（禿頭王）が西部を支配することが承認された。ロタールが亡くなった後に、870年のメルセン条約によりさらに中央部の北半分が二分されて、東フランク王国と西フランク王国とに併合されることになるが、今日のドイツとフランスの基礎は843年のヴェルダン条約によって固まったと言える。

この条約が締結される前年の842年に、ルートヴィヒとカルルはロタールに対抗して共闘するために支援し合うことをシュトラースブルクで自らの軍隊と共に誓った。これが『シュトラースブルクの誓い』であり、この時の誓いの原文は、カルルの側近としてその場に立ち会ったカルル大帝の孫、ニートハルトがラテン語で著わした歴史書(*Historiarum Libri IIII*)の中に記録されている(Müller S. 35ff. Rau S. 438ff.)。ただしその原本は現存せず、パリの国立図書館にある唯一の写本は1000年頃に書かれたと考えられているものである。問題の誓約文を検討する前に、それらが現れる文脈を知っておく必要があるため、まずその和訳を掲げる。

故に3月1日の16日前(=2月14日)にルートヴィヒとカルルは、かつてアルゲンタリアと言われていたが、今は一般にシュトラースブルクと呼ばれる町にて会合し、かつ下書き留められた誓いをルートヴィヒはロマン語で、しかしカルルはドイツ語で宣誓した。そして次のように誓いの前に、取り囲んだ軍隊に一方はドイツ語で、他方はロマン語で話し掛けた。しかしルートヴィヒの方

が年長であったので、先に次のように始めた：「いかに何度もロタールが我とこのわが兄弟を我らの父の死後、追撃して根絶やしに殲滅せんと企てたかを汝らは知っている。しかし兄弟関係もキリスト教も何らかの天性も、健全なる正義をもって我らの間に和平があることの助けになり得なかったので、ついに我らは強いられて事柄を全能の神の裁決に委ねて、何が各人に定められようとも、神の意向に満足せんとした。この事において我らは、汝らの知っている通り、神の慈悲により勝利者となったが、彼の方は打ち負かされて家来らと一緒に可能な所へと退却して行った。しかしその後、我らは兄弟愛に動かされ、かつまたキリスト教の民に同情して、彼らを追跡したり、殲滅したりしようとは思わず、少なくとも今後は各人に自分の権利が認められるよう、これまで、以前の通りに要求してきた。しかし彼はその後、神の裁決に満足せず、敵意ある手でもって再び我とこのわが兄弟を追跡することを止めず、加えてまた、我らの民を放火や強奪、虐殺でもって蹂躪している。この理由により今や我らは必要に迫られて会合したのであり、かつ我らは汝らが我らの確固たる信頼と強固な兄弟関係を疑っているのではないかと思うが故に、我らの間のこの誓いを汝らの面前にて宣誓せんと決意した。我らは何らかの不当な利己心に誘惑されてこれを行うのではなくて、もしも神が我らに汝らの援助でもって平安を与えてくれるならば、我らは共通の利益をさらに確信するがためである。あつてはならないが、しかしもしもわが兄弟に宣誓した誓いを我が敢えて侵害したならば、我への服従から、かつまた我に汝らが宣誓した誓いから汝らの各々を我は解除する」。そしてカルルがこの同じ言葉をロマン語で述べ終えると、ルートヴィヒの方が年長であったので、先に、これを以後、自らは守ると誓言した：（ルートヴィヒの誓い=F1）。ルートヴィヒがそれを終えると、カルルはドイツ語で次のようにこの同じ言葉を誓言した：（カルルの誓い=D1）。しかし両者の軍隊が各々自分の言葉で誓言した誓いはロマン語では次の通りである：（フランス軍の有力者達の誓い=F2）。しかしドイツ語では：（ド

イツ軍の有力者達の誓い=D2)。これらの事を済ませると、ルートヴィヒはライン川を下ってシュバイエルを通り、そしてカルルはヴァスゲン山脈に沿ってヴァイセンブルクを通りヴォルムスの方へと行路を定めた。…かつ前述の兄弟、並びに軍隊の有力者達が前掲の協約を結んだあの日には大雪が降り、その後寒冷が続いた。

ニートハルトの説明によれば、まずルートヴィヒがドイツ語 (*teudisca lingua*) で自分の軍隊に対して今回の誓約を交わすに至った経緯と誓約の主旨を説明し、次にカルルがフランス語 (*romana lingua* 「ロマン語」) で同じ事を自分の軍隊に対して説明した。この後ルートヴィヒは相手方のフランス軍に向かってフランス語で誓いの言葉を述べ、次にカルルがドイツ語で相手方のドイツ軍に向かって「この同じ言葉」 (*haec eadem verba*) を誓った後に、フランス軍の有力者達 (*primores populi*) がフランス語で、ドイツ軍の有力者達はドイツ語でそれぞれ誓いを立てたことになっている。そこで、誓いの原文を対比して本当に仏独両語の誓約文が同一であったのか否かを検証すると同時に、ドイツ語文の表現や構成を他の古期ドイツ語の作品と比較することにより、ドイツ語の誓約文が翻訳 (調) なのか否かを検討する。以下では写本上の明らかな書き間違いを訂正してある。

#### **F1-1: Pro deo amur 「神への愛故に」**

##### **D1-1: In godes minna 「神への愛故に」**

属格形 *godes* は主語的な付加語「神の」ではなく、客語的な付加語「神への」として用いられている。*godes* をこのように解する根拠は『タツィアーン』 (=T.) から得られる。

*wanta ir gotes minna ni habēt in iu* 「汝らが神への愛を汝らの (心の) 中に持っていないこと」 (T. 88,13=J. 5, 42 *dilectionem dei*)

*ir ... forliezūt ... gotes minna* 「汝らは…神への愛を放棄する」 (T. 141, 17=L. 11,42 *caritatem dei*)

*in godes minna* に対応する表現は『ヘーリアント』 (=H.) や『オットフリート』 (=O.) に見られる。

*that sia jāro gihwem an godes minnia an them hēlagon dage*

ēnna haftan mann abiddian scoldun 「彼らが毎年、神への愛故にその聖なる日に一人の捕らわれた男を願い求めるべきであったということ」(H. 5405—5407C)

*in gotes minna* iz dātun「彼らは神への愛故にそれを行った」(O. V, 25, 8)

F1-1の属格的な機能の斜格形 *deo* も「神への」(Nelson S. 201 : Genetivus obiectivus)と理解しなければならない。

**F1-2: et pro christian poblo et nostro commun salvament, 「かつ  
キリスト教の民と我らの共通の救済故に」**

**D1-2 : ind' in thes christānes folches ind' unsēr bēdhero gehalt-  
nissi, 「かつこのキリスト教の民と我ら両名の救済故に」**

定冠詞／指示代名詞の属格形 *thes* に対応する語は F1-2 にはない。christian poblo/*thes christānes folches* 「キリスト教の民の」は *salvament/gehalt-nissi* 「救済」にかかる。\**poblus* (<ラテン語 *populus*)/*folch* (= *folk*) は「民」と「軍隊」の両方を意味する。*nostro* が所有代名詞「我らの」、*commun* が形容詞「共通の」であるのに対して、*unsēr* は人称代名詞 *wir* 「我ら」の属格形、*bēdhero* は数詞 *bēdhe* 「両名」の属格形である。*unsēr bēdhero* と同じ構成は『ヘーリアント』に見られる。

*ūsēr bēthero fader* 「我ら両名の父」(H. 5936C)

古期ドイツ語、特に古ザクセン語では1人称や2人称の二人の密接な関連を強調する時に、複数形ではなく、両数形を用いることがあった。

*thū nū habas ubilo gimarakot unkaro selbaro sið* 「汝は今や我ら二人(＝アダムとイブ)自身の運命を悪く定めてしまった」(『ザクセン語の創世記』1-3)

*ist unkēr zweio wesān ein* 「我ら二人(＝キリストと神)の存在は一つである」(O. III, 22, 32. 古高ドイツ語の唯一例)

ドイツ語の誓約文において両数形が用いられていないのは、ルートヴィヒとカルルの関係がさほど一体的ではないという判断が根底にあったのかも知れない。

**F1-3 : d' ist di in avant, 「この日より以降」**

**D1-3 : fon thesemo dage frammordes, 「この日より以降」**

前半は全く同一の、前置詞＋指示代名詞＋名詞の構成であるが、後半は前置詞＋副詞の *in avant* 「以降」に副詞の *frammordes* 「以降」が対応する。ドイツ語の副詞は『オットフリート』(O.III,26,6 *frammortes*)でも用いられている。

**F1-4 : *in quant deus savir et podir me dunat*, 「神が知恵と力を我に与える限り」**

**D1-4 : *sō fram sō mir got gewiz ci indi mahd furgibit*, 「我に神が知恵と力を与える限り」**

F1-4の *savir* 「知恵」と *podir* 「力」は共に不定詞 *savir* 「知っている」と *podir* 「できる」が名詞化したものであるが、D1-4の *gewizci* (= *gewiz3i*) 「知恵」は *wiz3an* 「知っている」の、*mahd* (= *maht*) 「力」は *mugan* 「できる」の派生語である。F1-4では間接客語の *me* 「我に」が定動詞の直前に置かれているのに対して、D1-4では *mir* は主語の前に出ている。後(F2-6, 2-7, 2-9, 2-10)でも見られるが、文末の定動詞の直前に代名詞や代名詞的副詞が置かれているのがフランス語の誓約文の語順の特徴である(F1-8は例外)。D1-4に完全に対応する表現は『フルダの懺悔』に見られる。

*sō fram sō mir got almahtigo mahti enti giwiz3i forgibit* 「我に全能の神が力と知恵を与える限り」

*Almahtig truhtin, forgib uns mahti inti giwiz3i* 「全能の主よ、我らに力と知恵を与え給え」

定動詞 *dunat/furgibit* は *dunar/furgeban* 「与える」の叙実法・現在形。

**F1-5 : *si salvarai eo cist meon fradre Karlo* 「然らば我はこのわが兄弟のカルルを支援するつもりである」**

**D1-5 : *sō hald' ih thesan minan brudher*, 「然らば我はこのわが兄弟を支援する」**

F1-5の(意志的)未来形 *salvarai* (<*salvar* 「支援する」)にD1の現在形 *hald(u)* (<*haldan* 「支援する」)が対応しているが、古期ドイツ語の現在形は未来事象を表わすこともできる。

*ik gangu imu at erist tō* 「我は最初に彼の所へ行く」(H. 4819 M)

er *richisōt* githiuto kuning therero liuto 「(将来) 彼は立派にこれらの民の王として君臨する」(O. I, 5,29)

si salvarai eo という構成における主語の人称代名詞 eo「我」の使用と定動詞の後の位置についてアリエール(S.211)は「sō hald ih の透き写しか」と言う。D1-5には相手の名前の Ludhuwigan (対格形) が欠けている。

**F1-6 : et in ajudha et in cadhuna cosa, 「助力においても各々の事においても」**

D1には対応する言葉がない。Karsten は2番目の et (現存の写本上では&) を er「…であろう」(=F2-10 er)の間違いと解して (r と t の筆記体はよく似ていた), F1-6をF1-5の言い換えとみなしている:「かつ(我は) 各々の事において助力であろう (=助力するであろう)」。そうすると D1は言い換え故に対応語句を省略したことになる。いずれにしてもこの言葉によって20歳位年下の異母弟に対するルートヴィヒの、年長者にして経験者としての入念な配慮がカルルの側から期待されているに違いない。この時カルルはまだ18歳, ルートヴィヒは38歳位であった。

**F1-7 : si cum om per dreit son fradra salvar dift, 「人が当然, 自分の兄弟を支援すべき通りに」**

**D1-7 : sōsō man mit rehtu sinan bruodher scal, 「人が当然, 自分の兄弟を(支援)すべき通りに」**

F1-7の om「ある人」はドイツ語の man にならってラテン語の homo「人」から作られた不定代名詞であると思われるが(ドーザ S.46. 島岡1982, S.91), 既に6世紀にトゥールのグレゴリウスが homo を不定代名詞として用いているので (ut inter tabulas adspicere *homo* non posset「文書の中を吟味できないようにと」Rhee S.14), om (>現代フランス語の on)は独自の発展かも知れない。不定代名詞 man の用例は9世紀初めの『ヒルデブラントの歌』(=HL.)以来見られる。

mit gēru scal *man* geba infāhan, ort widar orte <sup>かたき</sup>「敵がよこす贈品は槍を用いて収むべし, 穂先と穂先, 相合わし」(HL.34,35)  
habēt ir hier wa3, tha3 *man* e3zan megi? 「汝らはここに食べることのできる何かを持っているか」(T. 231, 1=L. 24, 41 quod

manducetur 「食べられる物」)

F1-7では不定詞の *salvar* 「支援する」が用いられているが、D1-7では不定詞の *haldan* 「支援する」は省略されている。F1-7に不定詞があるのは F1-6の挿入と関係していると思われる。D1-7と同様の、しかも *mit rehtu* 「当然」を伴う例が古期ドイツ語の他の作品に見られる。

*sō ih mit rehtu aphter canone scal* 「我が当然、条規に従ってなすべき通りに」『司祭の誓い』

*sō ih mit rehtu scolta* 「我が当然なすべきであった通りに」『フルダの懺悔』

前置詞 *mit* と共に用いられている *rehtu/rehto* は *reht* 「当然の事」の具格形であり、この形が現れる3作品の成立時期が9世紀の中頃であることを明示している。10世紀になると具格形に代わって与格形の *rehte* が使われるようになる。F1-7の様相の助動詞 *dift* はドイツ語学の文献では *dist* となっている場合が多いが、フランス語学の文献では D1-7の *scal* (*sculan* 「しなければならない」の叙実法・現在形)との関係からラテン語の *debet* 「しなければならない」の発展形と解されている。

**F1-8 : *in o quid il mi altresi fazet*, 「彼が我を同様に（支援）するならば」**

**D1-8 : *in thiū tha3 er mig sō sama duo*, 「彼が我を全く同様に（支援）するならば」**

条件の従属接続詞 *in o quid* と *in thiū tha3* はほとんど同じように構成されている（前置詞＋指示代名詞＋従属接続詞）。*in thiū tha3* は『オットフリート』にも見られる。

*in thiū tha3 ih i3 kunni* 「我にそれができるならば」(O.I,2,42) この定動詞 *kunni* も *fazet* (<*facere* 「する」) や *duo* (<*duon* 「する」) と同様に叙想法形 (= 接続法形) である。*altresi/sō sama* は副詞「同様に／全く同様に」。 *fazet/duo* は *salvet/halde* に代わる代動詞 (*Voretzsch* S. 6: *verbum vicarium*) であり、元の動詞と同じ斜格形／対格形の客語 *mi/mig* (= *mih*) を取っている。類例は古期ドイツ語の他の作品に見られる。

*than gi thia armostun eldibarno ... farhogdun ..., than dēdun* (= *farhogdun*) *gi iuwana drohtin sō samo* 「汝らがあの最も貧しい

人々を軽蔑した時、汝らは汝らの主を全く同様に（軽蔑）したのだ」(H.4436—4439C)

noh ni minnōtun sō fram tha3 liocht ..., sō sie *duent* (= minnōnt) in giwissī tha3 selba finstarnissi 「又、彼らは、真にあの問題の暗黒を愛するほど、よくはその光を愛さなかった」(O.II,12,87.88)

**F1-9 : et ab Ludher nul plaid nunquam prindrai, 「かつロタールからはいかなる交渉も断じて受け入れるつもりはない」**

**D1-9 : indi mit Ludheren in nohheiniu thing ne gegango, 「かつロタールとはいかなる交渉にも関わらない」**

この部分は表現が全く異なっており、F1の方が強い表現である。prindre 「受け入れる」の未来形 prindrai に gegangan 「関わる」の現在形 gegango が対応している。F1-5の salvarai とこの prindrai は「1人称の意志をあらわし、厳密な意味での未来の時を示すものではない」(島岡1980, S.178)とされる。二つの意志的未来形によってルートヴィヒの積極性がカルルの側から期待されているに違いない。D1-9の in thing gegangan 「ある交渉／事に関わる」という表現は『オットフリート』にも見られる。

thō er in *sulih thing gigiang* 「彼がそのような事に関わった時」(O.II,9,58)

F1-9も D1-9も共に二重否定(nul ... nunquam/nohheiniu ... ne)でもって否定の強調が表現されている。このような二重否定は古期ドイツ語ではよく見られる。

ther heilant *ni* gab imo *nokhein* antwurti 「救世主は彼にいかなる答えも与えなかった」(T.197,7=J.19,8 : Ihesus autem responsum *non* dedit ei は単純否定)

*ni* afstād is felis *nigiean* 「その岩はどれも立ち続けない」(H.3700M)

**F1-10 : qui meon vol cist meon fradre Karle in damno sit. 「わが意志によりこのわが兄弟のカルルに対して害であり得る」**

**D1-10 : thē minan willon imo ce scadhen werdhēn. 「わが意志によ**



り彼に対して害になり得る」

qui は関係代名詞であり, *thē* は中性・複数・主格形の関係代名詞 *thiu* に代わる不変化詞である。このような関係不変化詞 *thē* は『ヘーリアント』や『オットフリート』にも見られる。

*thes wīdon rikeas (giwand), thē hē giwaldon scal* 「彼が支配することになっている, その広大な王国の終末」(H.268M.C 写本では *thes*)

*thio buah, thin (=thē in) fruma zaltun* 「彼らに救いを語った聖書」(O.V,6,19)

*meon vol* と *mīnan willon* は手段の状況語として用いられた斜格形／対格形(=絶対的斜格形／対格形)「わが意志により」であるが, 全く同一の表現が『司祭の誓い』に見出される。

*da3 ih ... sī mīnan willun fruma frummenti ...* 「我が・・・わが意志により善をなすことを(誓う)」

このような対格形の用例として, 先に引用した『ヒルデブラントの歌』35の *ort* 「穂先で」の外に次の例もある。

*nū fluic dū, vihu mīna3, hera, fridu frōno in godes munt* 「わが蜂らよ, 神の保護下で主の加護をもって, 今こちらへ飛んで来い」  
『ロルシュの蜜蜂の呪文』

F1-10の *cist meon fradre Karle* 「このわが兄弟のカルルに対して」に対応する D1-10は簡単に人称代名詞 *imo* 「彼に対して」で済ましており, 先の D1-5と同様に, ここでも相手方の人名 *Ludhuwige* (与格形)の使用が避けられている。F1の方が入念かつ慎重である。定動詞の *sit* と *werdhēn* は共に *estre* 「(で)ある」と *werdhan* 「(に)なる」の叙想法形であるが, 先行詞の数が異なるので, 前者は単数形, 後者は複数形である。この関係文の定動詞が叙想法形になっているのは, その事象の将来の可能性を表わすことと, 主文が否定文であることの二重の理由による。類例は:

*ni habēn man, mittiu da3 wa33er giruorit wirdit, der mih sente in den wīwāri* 「この水が動かされる時, 我をこの池に入れてくれる人を我は持たない」(T.88,2=J.5,7mittat)

D1-10に類似する表現は『オットフリート』に見られる。

tha3 imo io zi scaden ward 「彼に対してかつて害になった事」  
(O.II.4,37)

**F2-1 : Si Lodhuvis sagrament, 「もしもルートヴィヒが誓いを」**

**D2-1 : Oba Karl then eid, 「もしもカルルがその誓いを」**

F1-2の christian poblo の場合と同様に、F2-1の sagrament には定冠詞が用いられていないが、D2-1では D1-2の thes christānes folches のように、定冠詞が用いられている。ここの then eid と次の D2-2 の bruo-dher や Ludhuwige から、ゲルマン語・前古期ドイツ語の無声摩擦音/θ/が語頭ではそのまま th [θ] として、しかし語中では有声化して dh [ð] として、語末ではさらに有声閉鎖音化して d [d] として現れていることが分かる。この状態は、この作品の原本が9世紀の半ばに作られたことの証拠になる。

**F2-2 : que son fradre Karlo jurat, 「彼の兄弟のカルルに誓った」**

**D2-2 : then er sinemo bruo-dher Ludhuwige geswuor, 「彼が彼の兄弟のルートヴィヒに誓った」**

que/then は関係代名詞。F2-2には D2-2の er に対応する主語が省略されている。F1-8の in o quid il mi altresī fazet では D1-8の er に対応する il が用いられていた。定動詞の jurat/geswuor (写本上では gesuor) は jurar/gesweran 「誓う」の叙実法・過去形である。

**F2-3 : conservat, 「守り」**

**D2-3 : geleistit, 「果たし」**

これは F/D2-1の続きで、関係文 F/D2-2が挿入されていた。この二つの動詞は共に conservar と geleisten の叙実法・現在形である。

**F2-4 : et Karlus meos sendra 「かつわが主人のカルルが」**

**D2-4 : indi Ludhuwig mīn hērro, 「かつわが主人のルートヴィヒが」**

ここも全く同じ構成である。F2-4の sendra 「主人」はラテン語の形容詞 senex 「年取った」の比較級形 senior に由来するが、D2-4の hērro 「主人」はこのラテン語形にならって、形容詞 hēr 「気高い」の比較級形が名詞化されたものであり（『オットフリート』では hērero）、人間にも神にも用いられる。古期ドイツ語には本来、「主人」を表わす語として frō や

drohtin/truhtinがあるが、前者は frō mīn 「わが主よ」という表現で専ら神やキリストへの呼びかけとして使用され(『ルートヴィヒの歌』30は例外)、後者も専ら神とキリストに対して用いられる。

**F2-5 : de suo part 「彼の側から」**

**D2-5 : then er imo geswuor, 「彼が彼に誓った事を」**

この部分は完全に異なっている。D2-5では先行詞の then (eid) が省略されている。先行詞の省略は他の古期ドイツ語の文献にも見られる。

sagda *them* (=them, them) siu welda 「彼女は告げようと思っていた者に告げた」(H.293)

er rihtit *tha3* (= tha3, tha3) in worolt ist 「彼は世界にある物を治めている」(O.II,4,67)

**F2-6 : non l' ostanit/lo stanit/los tanit, 「それを果たさないならば」**

**D2-6 : forbrihchit, 「破るならば」**

F2のこの部分の解釈は専門家の意見が一致していない(セルキリーニ S.90-93, Rhee S.10, Nelson S.204)。D2-6の方は明白に forbrehhan「破る」の3人称・単数・現在・叙実法形であり、D2-4の続きで、関係文 D2-5が挿入されていた。F2-5,6よりも D2-5,6の方が強烈的な表現である。

**F2-7 : si io returnar non l' int pois, 「もしも我が彼をその事から翻意させ得ないならば」**

**D2-7 : ob' ih inan es irwenden ne mag, 「もしも我が彼をその事から翻意させ得ないならば」**

「彼をその事から」(l' int/inan es)の位置が違っている。さらに、int が代名詞的副詞「その事から」(<ラテン語 inde)であるのに対して、es は人称代名詞の中性・単数・属格形である。irwenden「翻意させる」が対格形客語(人物)と属格形客語(事物)を伴う用例は『ノートカー』にも見られる。

sō dīe sint, *tīe nīoman rehtes erwenden* nemag 「それで彼らは誰からも正義を翻意させられ得ない者達である」(N. I, 40, 4. 5)

pois/mag は様相の助動詞 *podir/mugan* 「できる」(F1-4 *podir* 「力」参照)の叙実法・現在形。

**F2-8 : ne io ne neuls, 「我も誰も」**

**D2-8 : noh ih noh thero nohhein, 「我もその者達の誰も」**

ne ... ne... /noh... noh...は否定の並列接続詞「…も…もない」, noh... noh...の他の例:

*noh thesēr suntōta noh sine eldiron* 「この男も彼の両親も罪を犯さなかった」 (T. 132, 2=J. 9, 3 *neque... neque...*)

*thaz ir noh hiar noh ouh thār ni betōt then fater* 「汝らがここでも又そこでも父に祈らないこと」 (O. II, 14, 64)

D2-8の *thero* は指示代名詞の男性・複数・属格形であるが、対応語は F2-8にはない。

**F2-9 : cui eo returnar int pois, 「我がその事から翻意させ得る」**

**D2-9 : then ih es irwenden mag, 「我がその事から翻意させ得る」**

*cui* (= *qui/que*) と *then* は関係代名詞・男性・単数・斜格形／対格形である。しかし D2-8の先行詞 *thero* は複数形なので、D2-9の関係代名詞も本来は複数形の *thē/thea/thia/thie* でなければならない。D2の起草者は *nohhein* 「誰も」が先行詞であると勘違いしている。類例は『ヘーリアント』に見出される。

*habdun im te gesīdea ... allaro barno bezta, thero thē io giboran wurdī* 「彼らは、かつて生まれた全ての子供の中の最高の子を道連れにした」 (H. 834.835M. 関係文の定動詞 *wurdi* は単数形)

**F2-10 : in nulla ajudha contra Lodhuwig nun li iv er. 「(我も) ルートヴィヒに敵対して彼 (=カルル) のためにいかなる助力でもあるつもりはない」**

**D2-10 : widhar Karle imo ce follusti ne wirdhit. 「(誰も) カルルに敵対して彼 (=ルートヴィヒ) のために助力にならない」**

これは F/D2-8の続きで、関係文 F/D2-9が挿入されていた。F2-10の代名詞的副詞 *iv* 「そこに」 (<ラテン語 *ibi*) は先に出た *in ajudha* 「助力において」を言い換えている。*er* は *estre* 「(で) ある」の1人称・単数・叙実法・(意志的) 未来形であり (<ラテン語 *ero*)、D2-10の *wirdhit* は *werdhan* 「(に) なる」の3人称・単数・叙実法・現在形である。従ってフランス語は F2-8の二つの主語の内の *io* 「我」に、ドイツ語は *nohhein* 「誰

も」に合わせて定動詞の人称を決めている。

既に F/D1-10 の所でも見たように、利害関係の動詞表現がフランス語は静的・状態的であるのに対して、ドイツ語の方は動的・変成的である。

F : in damno/ajudha estre 「害／助力である」

D : ce scadhen/follusti werdhan 「害／助力になる」

F2-10 の li 「彼のために」 に対する F2-7 の 1(i) 「彼を」 のように、フランス語では与格形と対格形は区別されていないが、ドイツ語はこの2形を明白に区別している。

与格形	対格形
F1-4 me	F1-8 mi
F2-10 li	F2-7 1(i)
F1-10 cist meon fradre Karle	F1-5 cist meon fradre Karlo
F2-2 son fradre	F1-7 son fradra
D1-4 mir	D1-8 mig (=mih)
D2-10 imo	D2-7 inan
D1-3 thesemo	D1-5 thesan
D2-2 sinemo bruodher	D1-7 sinan bruodher

フランス語の me/mi, Karle/Karlo, fradre/fradra の語末母音の違いは本質的なものではない。フランス語の誓約文では、与格形と対格形のみならず、属格形も区別されず (F1-1 deo, F1-2 poblo), この3形は一つの斜格形 (=被制格形, 賓格形) として主格形 (F1-4 deus, F2-1 Lodhuwigs, F2-4 Karlus meos sendra) に対立している。一方、ドイツ語は主格形 (D1-4 got, D2-1 Karl, D2-4 Ludhuwig mīn hērro), 属格形 (D1-1 godes, D1-2 folches), 与格形 (D1-9 Ludheren, D2-2 Ludhuwige, D2-10 Karle), 対格形 (D1-10 mīnan willon), 具格形 (D1-7 rehtu) の5形を区別している。

最後の主文は多重否定による否定の強調表現である。F2-8, 10 は四重に、D2-8, 10 は三重に否定されている。四重否定は極めて異例である。

F2-8, 10 : ne(1) io ne(1) neuls(2) ... in nulla(3) ajudha contra  
Lodhuwig nun(4) li iv er

D2-8, 10 : noh(1) ih noh(1) thero nohhein(2) ... widhar Karle

imo ce follusti ne(3) wirdhit

先に述べたように、古期ドイツ語では二重否定は珍しくはないが、三重否定も稀に見出される。

that sān *nī* swerea *neoman* ēnigan ēdstaf eldibarno, *ne* bi himile themu hōhon... *ne* bi erdu thār undar 「断じて誰も人の子の何らかの誓いをあの高い天にかけても、この下の地にかけても誓わないこと」(H.1507—1510M)

gibōt... *noh* ouh *nī* fuartin in thiū thing mit in *niheinan* pending 「さらに又、彼らがその事にいかなる金をも持参しないよう命じた」(O.III, 14, 89—92)

否定の副詞の位置に関しては違いが見られる。ドイツ語の *ne* は定動詞の前に置かれることが大原則であるが、フランス語の *non/nun* は定動詞の前の代名詞や代名詞的副詞の前に置かれている。

F2-6: *non* l' ostanit/lo stanit/los tanit

F2-7: si io returnar *non* l' int pois

D2-7: ob' ih inan es irwenden *ne* mag

F2-10: in nulla ajudha contra Lodhuwig *nun* li iv er

D2-10: widhar Karle imo ce follusti *ne* wirdhit

仏独両語の誓約文の中の定動詞の位置は全て同じである。主文は3例あって、1例(1-5)は定動詞が2番目に、他の2例(1-9, 2-10)では文末に置かれている。古期ドイツ語の主文の定動詞は文頭から2番目に置かれている場合が多いが、それ以外の位置にあることも珍しくはなく、文末に置かれている場合もある。

dū *bist* dir, altēr Hūn, ummet spāhēr 「年老いたフン人よ、汝は大変ずる賢い」(HL.36)

ik mī dē ödre *wēt* 「我は他の人々を知っている」(HL.11)

副文は9例(1-4, 1-7, 1-8, 1-10, 2-1~3, 2-2, 2-4~6, 2-7, 2-9)あり、全て定動詞は文末に置かれている。古期ドイツ語における副文の定動詞の位置は、例外も多いが、文末が原則である。ドーザ(S.49)はフランス語文が「ゲルマン語の原文の譯、なぞりのように見える」と述べている。誓約文の中の副文には不定詞+様相の助動詞の構成が見られる(F1-7)

が、このような構成も古期ドイツ語では珍しくはない。

werdar sih hiutu dero hregilo *hrūmen muotti* 「今日これらの鎧を自慢することができるのか否か」(HL.58)

habēt ir hier waz, tha3 man *e33an megi?* 「汝らはここに食べる  
ことのできる何かを持っているか」(T.231,1=L.24,41 *man-*  
*ducetur*)

しかしこの構成の中への他の語の受け入れ方はフランス語とドイツ語とは大いに異なっている。

F2-7: si io *returnar* non l' int *pois*

D2-7: ob' ih inan es *irwenden* ne *mag*

F2-9: cui eo *returnar* int *pois*

D2-9: then ih es *irwenden* *mag*

ドイツ語では否定の副詞 *ne* のみ間に入るのに対して、フランス語では否定の副詞 *non* の外に、人称代名詞 *l(i)* や代名詞的副詞 *int* も入ることができる。ただし古期ドイツ語の韻文作品でも韻律等の都合で他の語の割り込みが見られる（例えば『オットフリート』S.13）。

以上のように、仏独両語の誓約文を個別に対比・検討した結果、当然のことながら全く同一の表現が多数見られる反面、全く異なった表現になっていたり、対応する個所そのものがドイツ語の方に欠けている場合さえあることが判明した。重要なのは、統語論的な相違ではなくて、思想的な相違である。このような両者の間の相違も又、事前に双方の誓約文の語句を逐一打ち合わせておいた結果であろう。全般的にはフランス語の誓約文の方が慎重かつ入念に作成されていると言える。

ドイツ語の誓約文の表現には不自然な所はなく、ほとんどの場合に同時代のドイツ語の他の作品の中に同じ表現や形式を見出すことができた。他方、フランス語の誓約文には不明な個所があり、また一見ドイツ語的な部分もあるとされるものの、このフランス語の誓約文は最古のフランス語作品であるのと、同時代の作品がほとんどないため、他との対比ができず、翻訳（調）か否かの判定は困難である。しかし互いに全く異なる部分があることから、一方が他方の翻訳であるとは考えられない。ただ、既に指摘されている通り（Ewald S.53）、当時のラテン語による

公文書の語句がどちらにも参照されていることは間違いない。そして、ルートヴィヒの冒頭の演説にもある通り、二人の王の宣誓の目的は互いに相手方の軍隊の理解と信頼を得ることであつたし、双方の有力者達も自らの言葉で誓約したとされているので、仏独どちらの誓約文にも各々の軍隊の中で使われていた共通の言葉が使用されていると考えなければならない。フランス語文の方言は「北部のものであるが、それ以上に細かく地域を限定できない」(リカード S.55)と言われるが、ドイツ語文の方言は、ih, forbrihchit, gewizci, thaz, ce 等から高地ドイツ語であり、さらに dage, duo, godes 等からラインフランク語であつて、oba, furgibit から中部フランク語ではないことが明白である。

ニートハルトが、ルートヴィヒの演説はラテン語に翻訳して記録しているのに対して、二組の誓約文を原語で記し、敢えてラテン語に直さなかったのは、それぞれの原文の独自性と協約(pactum)の原本としての重要性を強調するという政治的な意図があつたからに違いない。そして民族語重視の方針は後に、言語圏の違いによる帝国分割(ドイツ語圏の東フランク王国とフランス語圏の西フランク王国)というヴェルダン条約やメルセン条約の基本原則へと強化されることになる。

#### 参考文献

- アリエール、ジャック『フランス語の形成』大高順雄訳1992 白水社。  
 工藤 進『ガスコーニュ語への旅』1988 大学書林 (S.48—55に『ストラスブールの誓約の周辺』)。  
 島岡 茂『ストラスブールの誓約』人文論集(早大法学会) 18, 1980, S.159—180。  
 島岡 茂『古フランス語文法』1982大学書林。  
 セルキリーニ、ベルナル『フランス語の誕生』瀬戸直彦・三宅徳嘉訳1994 白水社。  
 高橋輝和『古期ドイツ語文法』1994大学書林。  
 ドーザ、アルベール『フランス語の歩み』川本茂雄訳1954 白水社。  
 リカード、ピーター『フランス語史を学ぶ人のために』伊藤忠夫・高橋秀雄訳1995 世界思想社。  
 Ewald, Konrad : *Formelhafte Wendungen in den Straßburger Eiden*. In : *Vox Romanica*. 23, 1964, S. 35—55.



- Ewert, A. : *The Strasburg Oaths*. In : *Transactions of the Philological Society*, 1935, S.17—35.
- Karsten, Gustav: *Zu den Strassburger Eiden*. In : *Modern Language Notes*, 6, 1886, Sp.172—175.
- Koller, Erwin : *Zur Volkssprachlichkeit der Straßburger Eide und ihrer Überlieferung*. In : *Althochdeutsch*, I, 1987, S.828—838.
- Müller, Ernestus : *Nithardi Historiarum Libri IIII*. Hannoverae 1907.
- Nelson, H. L. W. : *Die Latinisierungen in den Straßburger Eiden*. In: *Vox Romanica* 25, 1966, S. 193—226.
- Rau, Reinhold: *Quellen zur karolingischen Reichsgeschichte*. Erster Teil. Darmstadt 1977.
- Rhee, Floris van der: *Die Strassburger Eide, altfranzösisch und althochdeutsch*. In: *In diutscher diute. Festschrift für A. van der Lee zum 60. Geburtstag. Amsterdamer Beiträge zur älteren Germanistik*, 20, 1983, S. 7—25.
- Schmidt-Wiegand, Ruth : *Eid und Gelöbniß, Formel und Formular im mittelalterlichen Recht*. In: *Recht und Schrift im Mittelalter*, Sigmaringen 1977, S. 55—90.
- Voretzsch, Karl : *Altfranzösisches Lesebuch*. Halle 1961.

## Die Straßburger Eide — im Kontrast gesehen

Terukazu TAKAHA Š I

Als "Straßburger Eide" aus dem Jahr 842 sind zwei Paar Eidestexte in Volkssprachen überliefert : der Eid Ludwigs des Deutschen im Altfranzösischen (= F1) und der Karls des Kahlen im Althochdeutschen (= D1) einerseits, sowie der Eid der Anführer des französischen Heers (= F2) und der der Anführer des deutschen Heers (= D2) andererseits. Eine kontrastive Analyse der Eidestexte ergibt synta-

ktische und gedankliche Unterschiede. Wichtiger scheinen mir die gedanklichen Abweichungen :

1. F1 hat die beiden finiten Verben in futurischer Form, die für den Willen des Schwörenden steht : F1-5 : *si salvarai eo cist meon fradre Karlo* 'so werde ich diesen meinen Bruder Karl unterstützen' und F1-9 (siehe unten). Die entsprechenden Verben in D1 sind aber einfach im Präsens gesetzt: D1-5 : *sō hald* 'ih thesan minan bruodher 'so unterstütze ich diesen meinen Bruder' und D1-9 (siehe unten). Hier erwartet man sicher von Ludwig, daß er bei der Erfüllung seines Eides aktiver sei. als sein viel jüngerer Halbbruder Damals war Ludwig ca. 38 Jahre alt, Karl aber noch 18.
2. F1-6 : *et in ajudha et in cadhuna cosa* 'sowohl in Hilfe als auch in jeder Sache' hat keine Entsprechung in D1. Mit diesem Ausdruck ist die Erwartung von Seiten Karls geäußert, daß Ludwig als älterer und erfahrenerer Mann für ihn in jeder Hinsicht sorgen möge.
3. F1-9 : *ab Ludher nul plaid nunquam prindrai* 'ich werde von Lothar durchaus keine Verhandlung annehmen' entspricht D1-9 : *mit Ludheren in nohheiniu thing ne gegango* 'ich gehe mit Lothar auf keine Verhandlungen ein'. Hier ist eine stärkere Entschlossenheit Ludwigs erhofft.
4. In F1 wird Karls Name zweimal genannt (F1-5 und F1-10), während Ludwigs Name in D1 nicht vorkommt. Es handelt sich dabei um Sorgfältigkeit und Behutsamkeit auf Seiten Karls.
5. In F2-4~6 heißt es : *Karlus meos sendra de suo part non l' ostanit / lo stanit / los tanit* '(wenn) Karl mein Herr ihn (=seinen Eid) seinerseits nicht hält.' Aber D2-4~6 : *Ludhuwig mīn hērro, then er imo geswuor, forbrīhchit* '(wenn) Ludwig mein Herr (den Eid), den er ihm geschworen hat, bricht'. F2 ist weniger drastisch als D2.

6. In F2-8,10 ist der Satz viermal verneint : *ne(1) io ne(1) neuhs* (2) ...*in nulla(3) ajudha contra Lodhuwig nun(4) li iv* (= *in ajudha*) *er* 'werde weder ich noch keiner ... gegen Ludwig ihm (= Karl) in keiner Hilfe nicht sein' (wörtlich), während er in D2 -8, 10 dreimal negiert ist : *noh(1) ih noh(1) thero nohhein(2)* ... *widhar Karle imo ce follusti ne(3) wirdhit* 'wird weder ich noch keiner derer ...gegen Karl ihm (= Ludwig) nicht zur Hilfe' (wörtlich). F2 zeigt hier die größere Negativität als D2.

Die Ausdrücke der althochdeutschen, und zwar altrheinfränkischen, Eidestexte haben keine unnatürlichen Stellen und sogar in den meisten Fällen genaue Entsprechungen in anderen altdeutschen Texten. Im Gegensatz dazu findet man in den altfranzösischen Eidestexten, den ältesten Sprachdenkmälern des Französischen, sowohl unklare Stellen als auch scheinbar deutsche Wortstellungen. Da es aber zwischen jedem Paar der Straßburger Eide mehrere gedankliche Verschiedenheiten, wie oben gesehen, gibt, muß man annehmen, daß die eine Eidestextgruppe keine Übersetzung der anderen ist.

Die Textpaare stellen die Originale des 'pactum' (Nithard, *Historiarum Libri IIII*, III,5) dar, die jeweils in der Gemeinsprache des betreffenden Heers abgefaßt sind. Nithard hatte sicher eine politische Absicht, die textliche Selbständigkeit und die vertragliche Wichtigkeit der Straßburger Eide zu betonen, indem er im Unterschied zu der ins Lateinische übersetzten Rede Ludwigs die Eidestexte so in den beiden Volkssprachen überlieferte.